

岡山県立倉敷まきび支援学校 第3回 学校運営協議会 議事録

開催日：令和6年2月27日(火)
会場：大会議室

開会あいさつ（梶谷校長）

今回で今年度最後の開催となる。一年の振り返り、来年度の方向性の確認を行いたい。学校自己評価アンケートの結果が報告されるが、それぞれの立場からご意見をいただきたい。

岡山県の特別支援学校は、今年度ですべてコミュニティ・スクールに移行した。本校も開校以来、皆様のご協力の下、実のあるものになっていると実感している。

学校自己評価について（主幹教諭）

保護者からはすべての項目において肯定的評価が90%の高い評価であったことを報告した。教職員との比較や自由記述などから見えてきた課題については、改善策を提案した。

〈委員より〉地域での学習の場として提供できる形を一緒に探っていきたい。

学校生活アンケートについて（岸本教頭）

今年度、認知されたいじめ件数が8件となった。昨年度より増えているが、月1回の困ったことアンケートの実施等、いじめの防止、早期発見への取り組みの強化によるものではないかと考えている。今後も児童生徒の状況の把握に努め、いじめの防止や早期発見につなげたい。

〈委員より〉発見の機会を多く持っていることはとてもよい。

本年度の卒業生の進路について（岸本教頭）

全員の進路先が決定した。一般就労する生徒は、職業コース11名、生活コース4名で、昨年度に比べて生活コースの割合が上がっている。今年度より、生活コースでは一日を通して作業学習をする曜日を設けた。それにより、働く力につながる体力や集中力を養うことができたと思われる。

〈委員より〉就労をすると一日4時間から8時間の労働になる。一日を通しての作業学習は実際に働くうえでプラスになるため、ぜひ継続をしてほしい。

本校生徒との懇談

各グループに生徒2名を迎え、懇談を行った。「将来の夢」「不安に感じていること」をテーマに生徒が力強く語り、委員からの質問に受け答えをしたり、温かいメッセージを受け取ったりした。今回初めての取り組みで、生徒と直接交流できたことで委員からも好評をいただいた。

グループ協議

就労班

事業所参観日では、授業参観、グループ協議、講演の内容で実施した。広報活動を広く行い、多くの方に参加していただくことができた。実施後のアンケートからも好評であったことが伺えた。

環境・安全班

今年度は新たに公民館分館の清掃を地域の方の要望に応じる形で実施した。来館者もとてもきれいになったことを喜んでいた。避難所体験については、来年度合同で実施できるように体制を整えたい。来年度に向けては活動の精選をし、一つひとつに丁寧に取り組んでいきたいという思いを共有した。

福祉班

まきびカフェは参加者のニーズを踏まえながら内容を検討し、3回とも違う内容で実施した。出張相談会は、個人懇談週間に日程を合わせたり、事前に声をかけたりして参加を促すことができた。また、学校公開などの機会を捉えて派遣事業について地域の学校に周知し、センター的機能を果たしていきたい。

教育班

生徒との懇談会では、将来の夢を力強く語る姿を見ることができた。自己肯定感が高まっていると感じた。また、今年度は箭田小学校、真備中学校との直接交流が実現した。くらしき作陽大学の学生の方の中には、教育実習をきっかけにボランティアに来てくださっている。そういったつながりを継続していきたい。

令和6年度学校経営計画について（梶谷校長）

今年度のものから変わるところ（以下の3点）を中心に報告した。

- ①西日本豪雨の被災から5年が経ち、次のステップへという思いから、「復興」という言葉は除いた。
- ②部門の呼称について、知的障害部門をA部門、肢体不自由部門をB部門とすることを加えた。
- ③まびふれあい公園の日常的な活用に加え、非常時にも活用できるようにしていく。

まとめ（着席順）

百本さん（地域学校協働活動推進員）

地域の中に、特別支援学校、小学校、中学校があることはとてもありがたい。今後も地域コーディネーターとして各校と連携を深めたい。

瀬戸山さん（くらしき作陽大学講師）

この会に参加して、自立と社会参加を目指して丁寧に運営していることが伝わった。特別支援学校の教員を志望する学生も増えてきている。今後も手を取り合って協力していきたい。

藤本さん（ハローワーク総社所長）

事業所参観日では、生徒が説明する場面があった。人前で話すことは、社会で生きるための力につながるため、そういった場があることはとてもよい。

唐川さん（ももぞの学園施設長）

ももぞの学園からの通学は厳しい環境（スクールバス：50分、電車通学：自転車まで足守駅まで11km、そのあと電車を乗り継いで）である。しかし、子ども達は休まず通っている。根底に「学校が好き」という気持ちがあるからと思っている。来年度卒業予定の7名も残りの一年間頑張ってもらいたい。

永田さん（倉敷地域基幹相談支援センター所長）

福祉制度が大きく変わっている。保護者は当然学校を頼ってくると思う。「誰に聞けばよいか。」といった保護者からの質問に答えられるように教員も福祉について知識を得てほしい。福祉の立場から協力してあげたらと思っている。

川崎さん（真備地域生活支援センター所長）

近年は特別支援学校の児童生徒、保護者からだけでなく、一般の小学校、中学校からも問い合わせや相談が増えてきた。小学校、中学校ともかかわりを持ち、協働していきたい。

浅利さん（本校PTA会長）

高3の子どもは、学校が好きで毎日笑顔で帰ってくる。その姿があるのは、学校や関係機関の支えがあったからこそだと感謝している。地域と学校が、さらに支え、支えられる関係へ発展することを願っている。

小山校長（真備中学校）

学校経営計画にある「生涯にわたって豊かな生活を送ることができる児童生徒の育成」という視点は、どの校種にも共通して大切なことである。この会での出会いやきずなを本校でも生かしていきたい。

武政校長（箭田小学校）

特別支援学校が本校から徒歩圏内にあることは大変ありがたい。今年度の交流では、子ども達がとても楽しそうにしていた。また、事後に心温まるやりとりも見られた。今後も交流を継続していきたい。

上田さん（箭田地区まちづくり推進協議会）

朝のあいさつ運動では生徒は毎日明るく返してくれている。学校の先生には子どもと関わる上で信頼を失うことのないようにしてもらいたい。

閉会あいさつ（中山会長）

生徒を交えてのグループ協議は今までにない形で、生徒から直接声を聞いたことがよかった。ぜひ継続してもらいたい。学校経営目標にあるミッション、ビジョンに、バリューを加えてはどうかと思う。来年度は「復興」から「創造」へ転換される節目になりそう。新しいまきびが見られることを期待している。